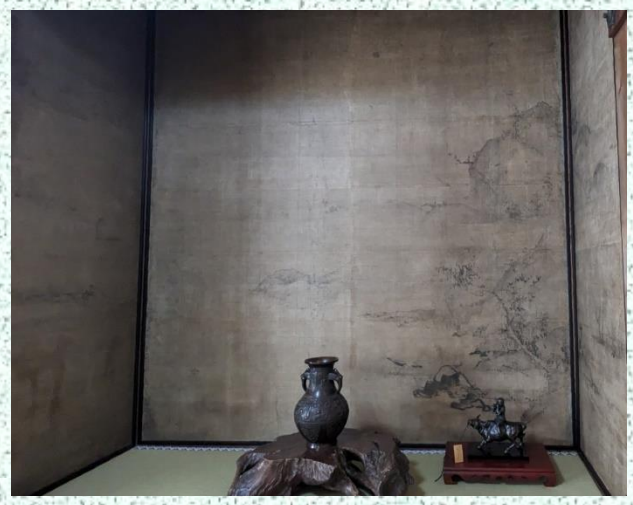
美術工芸品の部

春浦院（しゅんぽういん）（京都市右京区）　障壁画修理

春浦院は、臨済宗妙心寺派大本山妙心寺の南東に所在する境外塔頭で、昭和 37 年(1962)、新丸太町通敷設に伴い境内の多くを割譲しており、現在の境内はこの時に整備されたものです。

今回修理を行った紙本墨画山水人物図障壁画三面は、方丈の上間二之間にある床壁貼付けのもので、「雪渓筆」の落款があり、作者は江戸前期から中期の画家、山口雪渓であることがわかります。湖とその岸辺近くに浮かぶ荷物を載せた小舟、向こう岸には小屋、さらに遠くには寺院の塔が木々の間から見えています。三面共、縁に烈しい虫喰いがある他、縦横に多数の折れや亀裂が生じている箇所が見られること等から修理を行うこととされました。



良正院（りょうしょういん）（京都市東山区）木造阿弥陀如来立像修理

良正院は、浄土宗総本山知恩院の塔頭で、神宮道を挟んで黒門の向かい側に位置します。

江戸時代初期の寛永年間に岡山藩主池田忠雄が、生母で徳川家康の娘督姫の菩提を弔うため本堂が建立され、寺名も督姫の法号にちなんで「良正院」とされました。

今回修理された木造阿弥陀如来立像は、室町時代の作で、本尊としてこの本堂に安置されています。檜材の寄木造りで、足先を広げて蓮華座上に立ちます。

本像は経年による表面の彩色が浮き上がり、剥落が進行する状態にあることから、修理が行われました。

迎称寺（こうしょうじ）（京都市左京区）木造童子形立像修理

迎称寺は、紫雲山引接院と号する時宗の寺で、かつては京極一条にあり一条道場迎称寺とも呼ばれていましたが、江戸時代中期の寺町一帯の火災によって焼失したため、ほどなく鴨東の現在地に移っています。

今回修理を行った木造童子形立像は、昨年屋根修理を行った本堂に安置されている像で、室町時代の作とみられています。

檜材の寄木造で、髪を中央で分け、美豆良を結う童子形です。正面を向き、両頬にえくぼをあらわします。経年による劣化がすすみ、特に両足先の矧ぎ目が離れ、足枘の欠損により自立することも困難な状況であることから修理を行うこととされました。

法輪院（ほうりんいん）京都市左京区　木造阿弥陀如来立像修理

天台宗法輪院は、真如堂の通称で知られる真正極楽寺の塔頭寺院の一つで、寺伝によりますと法輪院の創建は文明１７年（1485）の室町時代であると伝わります。

今回の修理に際してファイバースコープによる像内調査が行われたところ、銘文及び納入品が確認され、本像の制作が「建長五年（1253）」まで遡ることが確認されました。また、「院寛法印の子 院蓮」と作者名があり、鎌倉中期の院派仏像として、とても重要な発見になりました。

本像は、経年による剥落が進行している箇所がみられること等から修理を行うこととされました。

地蔵寺（じぞうじ）（京都市左京区）木造地蔵菩薩坐像修理

延命山と号する天台宗地蔵寺は、寺伝では、康應元年（1389）、鞍馬山に純盛上人が開創すると伝えます。現在は天台宗比叡山延暦寺の末寺ですが、もとは鞍馬寺の末寺でもありました。

ながく無住であったところを明治 17 年（1884）に鞍馬寺の末寺として鞍馬寺第 3 世住職信楽晃秀師により再建されたものです。

今回修理を行う木造地蔵菩薩坐像は、鎌倉時代の作で、檜材の寄木造り、錆漆下地で彩色仕上げを施します。各所に経年による彩色の浮き上りがみられる他、接合が離れ危険な状態の個所もあること等から修理を行うこととされました。